個別のスポーツに対するスポーツ美学の応用
—— 野球の文化的背景で語られる「美的性質」をめぐって

根岸貴哉

1．はじめに

野球においては、「美しい」であるとか「芸術的」といった言及がなされるプレイやフォームがある。しかし、そうした野球の「美的な価値」について論じられることは少ない。本稿では、とりわけ日本における野球の美的な価値が、どのような根拠のもとに判断されているかについて明らかにしたい。 これまでスポーツ批評では、あくまでも技術的な面や作戦面での批評が中心であり美的な要素があるにもかかわらず、一部をのぞいてスポーツ批評では美学的な考察がなされていない現状にある (1)。

そのためにまず、スポーツ美学の先行研究を概観する。そして「野球の美学」をはじめとした、特定のスポーツにおいての美学の応用可能性と、そのスポーツ固有のコンテクストのうちで語られ、共有されている特殊な文化的背景があることを示す。

2．スポーツ美学概観 ——野球への適応を目指して

スポーツ美学では、スポーツにおいて美学は「可能」か、あるいはスポーツは芸術たりえるか、そもそもスポーツは芸術であるのか、といったことが議論の中心だった。すなわち、美学という学問上にスポーツが俎上にあがるのかどうかが中心的な議論であった。そのため数多くあるスポーツへの適応は少ない現状にある。

シェリル・ベルクマン・ドゥルーは美的にスポーツを考える場合には、フロースポーツ、形式スポーツ、そしてバレエやモダンダンスを含む舞踊の三つに分類することができるという (2)。他方で競技内におけるある種の美的な要素については、アーティスティックスポーツなどの分野で議論がされてきた (3)。しかし我々はスポーツ観戦をするなかで、「芸術点」を競うようなスポーツでなくても、「かっこいい」や「美し

い」、あるいは「芸術的だ」と思うことがある。

さて中井正一は、スポーツの解釈に際し、「競争性」と「筋肉操作」の二つを重要な概念として挙げる[(4)]。競争性に関してはスポーツそのものについて論じており、むしろそれはスポーツ哲学としての要素でもある。その一方で、筋肉操作については、スポーツ実践者の美感に関する問題である。中井のスポーツ美学では、とくに筋肉操作に重点があり、それはスポーツ実践者の内的感覚に、すなわちスポーツの実践者側へ着目したものであると、まとめることができるだろう。

後に、こうした中井の議論を引き継ぎ、近藤英男はスポーツの美学を「視覚構造」と「筋肉操作」に大別する[(5)]。「視覚構造」とは、スポーツを見る側における問題である。対して、「筋肉操作」は中井が重視したような、スポーツ実践者の問題である。

中井のスポーツ論においてもう一つの重要な論点は、「型」＝フォームへの着目であり、この「型」にある種の技術美を見出す。自然美と芸術美の間に技術美があると主張し、それはまさしく動きのなかで消えゆくものであるとした[(6)]。

「型への着目」および「技術美」に対しての指摘は、野球に対しても適応することが可能であると考えられる。野球には投球や打撃においてフォーム（＝「型」）が多く存在し、重要なものとされている。また、「技術美」に関しても当然ながら、野球というスポーツに適応することが可能であると考えられる。

次に、樋口聡のスポーツ美学をみてみよう。樋口はスポーツ美学を広範にわたり、包括的に研究している。樋口は実践者と観戦者の区別をしつつも、その両者に共通の美的な原理を追求する。そして樋口は、スポーツにおける美を、これまでのスポーツ美学では、自然美、芸術美、技術美という観点から考えられていたと整理する[(7)]。

スポーツの美を自然美であるとする立場では、「スポーツの美は意図的に生産されるわけではないから、人間の身体の美が自然の所産もあることに含めて、芸術美でなく自然美である」[(8)] という主張がなされているという。それに対して、スポーツを芸術美とする立場からは「スポーツは芸術であるからスポーツの美は芸術美である」[(9)] という意見があるという。

中井と同様、樋口もまた、スポーツにはある種の技術美があることを認める。そして樋口は、「スポーツの美が実践者の技術的熟練によってもたらされる」[(10)] という

前提を示したうえで、「技術的な美しさなのではなく、人間の生命力や人格性をその価値内容としてもつ」(11) と、言及している。このように論点を整理したうえで、樋口は「スポーツの美は必然から機能、そして生へ、という意識動向によってもたらされる人間美である」(12) という立場をとる。

こうした「人間美」は「人間が行う」ということにこそ意味がある。たとえば、「投げる」という運動においてもっとも適しているからこそ美しいとするのであれば、人間には到底投げることのできないような変化球と球速を出すことのできるピッチング・マシーンこそがもっとも美しい、ということになってしまう。しかしそれは人間が行うスポーツの美とは異なるものである。すなわち、スポーツを、あるいはその運動を、人間がするからこそ美的な要素を感じることができるとする必要がある。

以上、スポーツ美学の観点を概観してきた。次は、そのなかでもとくに重要な概念である「技術美」をめぐっての問題を取り上げる。

3．技術美としてのフォーム

樋口は、フォームに人間工学的、運動学的な、機能的な正しさに「一般にスポーツの美として考えられるのは、運動のフォームの美としての形式美である」と、ある種の美を見出している (13)。また、中井も技術的な「型」にある種の美的な価値を見出していた。しかし、それらの技術が人間工学的であるといっても、それは正しいと「されているもの」にすぎない。

鈴木直樹は過去の投球フォームには、ある種の流行・廃りがあることを指摘する (14)。つまり現代において正しいとされ、美しいとされているフォームを過去・未来において再現した場合、それはその時代にそぐわないとされ、美しくないとされる可能性がある。このようにフォームも時代に適合している必要性がある (15)。そのため技術美という観点において、野球のフォームは顕著にあらわれでるが、それらは時代によって変容しうる。

ところで、樋口は運動のフォームに関して、機能的な価値を重視すると同時に、その背後にある美的対象としての価値や、「精神的」な価値や意味を読み取る必要があ

ると述べている[16]。そうした精神的な美的価値を含めた、野球の文化的背景について考えていきたい。

4．文化的背景としての美的価値

日本の野球の精神性に関する部分において重要とされるのが、いわゆる「武士道野球」である[17]。この概念は、安部磯雄や飛田穂洲が提唱した野球論である。同時に「武士道野球」という考え方は、精神論、人格形成論でもある[18]。

精神性や人格を運動にみるという飛田の思想は、樋口が提唱した「人間美」という観点からも理解できる。樋口は「機能的なものにせよ、精神的なものにせよ、その意味がよみとられなければならない」[19]とフォームについて言及している。つまりは、選手の努力や、生涯といったようなものを含めることも可能であろう。だとするならば、体系的に人格形成を説きながらそれを野球へと応用した「武士道野球」における精神性についても、ある種の美的な価値を求める点があると考えることができる。

また「武士道野球」は、技術に関して、中井や樋口が言及していたような「型」を重視していた。飛田は投球フォームに対して、「正しく」、「なめらかに角のない」、「美しい」型を、厳しい練習を通して習得することを推奨し、それは同時に優れた人格形成にもつながるとした[20]。すなわち、優れた、美しい型は優れた人間性の表象であるという考えである[21]。

日本では、「型」を重視する風潮は現代においてもみられる[22]。対して、アメリカなどではこうした「フォーム」は、精神性を含んだ「型」というよりもむしろ、「Mechanic」なもの、機能的なものとして捉えられている。こうした文化的な背景の違いによって、すなわち観者の文化的背景の差異によって、同じ動きに見出せるものは異なってくるのではないだろうか。つまり日本野球の文化的背景をもとに、フォームを「美」として判断する、あるいは合理性や「なめらかさ」を「美」として認識することもあるのではないだろうか。

しかし、そのような文化的背景はいかにして流布されているのか。次節では、マスメディアとの関連からそのことについて考えていきたい。

5．メディアの作用

メディアの作用については、もはや現代では看過することはできない。樋口は、芸術観照において勝敗ではなく解釈が重要であり、また現代においてスポーツが大衆性を包含し、またジャーナリズムや商業主義との結びつきが強いと指摘する(23)。現に、野球のプレイに対する「かっこいい」や「美しい」、あるいは「芸術的」といった美的な価値に関する言及の多くは、マスメディアを通して行われている。

伊良部秀輝や吉井理人は、投手の「感覚」の重要性について述べている(24)。他方で、小田伸午は、主観と客観のズレを、写真や映像などを照らし合わせながら把握することを推奨する(25)。このように、スポーツ実践者の「感覚」は、時として客観視された写真や映像とは「ズレ」ている場合がある。渡辺俊介は、アンダースローにおいて腕を大きく上げる動作がマスメディアの写真によって「強調」されたという。そしてそれは、スポーツ実践者側にとっては意識したものではなく、そうした動作が強調されることによる弊害を指摘する(26)。

こうした瞬間的なある種の「美」が、マスメディアによって増長されるのは必ずしも見た目だけの問題にはとどまらない。先に述べたように、飛田や樋口はスポーツにおいて、ある種の「人格」のようなものを動きに見出す。この「人格」とは、選手の精神性や、努力、バックボーンといったものを含めたものであると理解することができるだろう。そして、そうした「人格」は、マスメディアの取材や報道によって周知される。

精神性や内面に関する問題に対しても、マスメディアはたびたび言及する。内面性に関しては、プロ野球選手はインタビューなどでの受け答えが蓄積されている。マスメディアは人間像を含めて選手像を報道、表象しているといえるだろう。

選手の情報を知った観者は、選手に対して単なる動きではなく、そうした背景を持った動きを見出す。それは新聞での報道によって知った知識を球場によって感じる場合であっても、またテレビ中継において野球観戦をする場合でも同様である。

くわえて、そうした原理は「人間性」のような抽象的なものだけでなく、「型＝フォー

ム」でさえも、選手のインタビューや解説者の言葉を飲み込んで、選手の動きに対して見出す。樋口は「スポーツの美的直感を補助する一方法としての科学的な方法を用いての運動観察とは、この運動学の知見を駆使することにほかならない」(27) とスポーツ観戦する者に対して高度な人間工学の知識を要求するが、しかし現代においては、個人一人ひとりが「運動学」の論文を読み解釈する、ということよりもむしろ、そうしたマスメディアによる「報道」の重要度が高いのではないだろうか。

「メディア」は必ずしも現実の野球を伝えるだけではない。野球漫画や野球ゲームなどの創作物もまた重要であろう。野球漫画や野球ゲームでは、実在する野球選手がたびたびモデルとなる。それは、野球選手の人格を含めたキャラクターの場合もあれば、フォームのようなあくまでも動きの見た目に近づけたものもある。時として、そうした創作物に対しても美的な価値を見出す。あるいは、作者自身がそうした表象を「美的」なものを意図してあらわしている場合もある (28)。

ただし、野球のようなスポーツの場合、選手は誰かに、あるいはメディアを通して「みられる」ということが目的ではないことにも注意をする必要がある。打者であれば目の前の投手の球をいかに打つか、投手であれば目の前の打者をいかにして抑えるか、ということが目的にある。もちろん、プロ野球のように興行として成立しているものであれば、みられるということを前提にしている可能性もある。しかし、それは副次的なものにすぎない。大前提として勝負に勝つために、技術美やその動きがなされているのではないだろうか。

いずれにしても以上のように、美的価値の多くはメディアによって取り上げられているものでもある。こうしたメディアによる増幅作用によって、野球への知識が少ない者であっても美しいと「思わされる」ことがある。あるいは、メディアによって、美的な価値がつくられている、とすることもできるだろう。

6.「突出性」による美的作用

野球の突出性は成績によってはかることができる。樋口は、「運動の本質的条件を満たしながら高い競技成績を示す運動経過は美的である。「勝つものは美的である」

のである」[29] と述べる。しかし、こと野球においては、なにをもって「高い競技成績」とするのか、それ自体が議論の対象となるものである。投手を例にとれば、その選手を成績の突出性から優れていると考える際に、投球回なのか、勝ち星なのか、あるいは防御率が優先されるのか、そうしたものを総合的に考えるのか。総合的に考える場合、どのように「総合的」とされるのかについては議論の余地があるだろう。

また、結果から導き出される成績としてではなく、過程としての球速やコントロール、あるいは変化球がどれほど優れているのかという意味での「突出性」を考えることもできる。ただ球速だけを追い求めたフォームでコントロールが悪いというようなフォームは優れているとはならない。球速を出すという点において優れていても、総合的に考えれば優れていないということになる。反対に、成績として「優れている」選手のフォームが工学的に「優れている」とは限らない。総合的に構成されたフォームがなぜ優れているのかという判断は、ある意味で観者の嗜好や判断に委ねられている。

そして、マスメディアを通して多くのファンは成績を知ることになる。総合的に構成されたフォームもまた、解説者などの言葉によって、再度その優秀さが、メディアによって周知される。

突出性は成績や数値だけにとどまらない。振る舞いや動きの見た目においても、突出しているということはありえる。フォームを例にとれば「トルネード投法」のように、多くの人がしていないようなフォームにはある種の突出性がある。それは、確かにマスメディアが写真や報道などで伝えてはいるものの、ある意味では解説者の言葉を介す必要がない。あるいは、マスメディアにおいて報道されずとも、球場などで一目見ればその突出性を理解することができる。

こうした点について、春木有亮は「規範」と「反規範」として、まとめている[30]。まず、統合的な美としての作用がある。これは、飛田や樋口が重視したものに近い。すなわち、運動としての「まとまり」を感じるということである。そのまとまりは、高度なまとまりであり、また技術的、機能的にも優れている。そして、時代や機能に「適合している」のである。その反対に、「反規範」としての美的作用がある[31]。野球に適応するならば、「トルネード投法」が際立つのは、あくまでも「通常のフォーム」

なるものがあるからといえる。また、通常のフォームであってもわずかながら人とタイミングが異なることなどによって、そのフォームは個別な、その選手独自のものとなる。そこに意味やある種の「美的」な要素を見出すことができる。こうした突出性や適合もまた、先に述べたようにマスメディアが報道するということになる。

7．結

以上、みてきたように、野球における「美的な価値」は、以下の要素が複合的におり重なりあって判断されている。

まず、人間が行うという「人間美」が前提にある。そこには、拡張すれば、選手の人格や精神、努力なども含まれる。そうした人間美を背景にした、機能的、技術的な美がある。そこには、人間工学的な「正しさ」が組み込まれている。しかし、そうした「正しさ」は、時として変容しうる。

第二に、文化的背景から判断される美的な価値がある。それは日本においては、「武士道野球」の影響によるところが大きい。そして、ここにも、前述したような「人間美」が含まれている。

第三に突出性である。これにはまず、成績としての突出性がある。優秀な成績をおさめているからこそ、そこには機能的なよさがあると考えることができる。そのため、そのスポーツにおいて優秀な成績をおさめている者の動きは、ある意味で機能的であり美しいとされる。そして、それに対して、ある意味でそうした適合から逸脱したものは当然ながら目立って見える。そのような突出した格好、見た目は「かっこいい」というような美的要素、美的な価値で語られることがある。野球のフォームは常にこの適合と不適合が組み合わさって構成されており、それらが観者の嗜好によって判断される。

第四に、マスメディアによる報道、表現という要素がある。以上の点を人々に知らしめる作用をマスメディアは持つ。成績のよい選手には、その優秀さから、機能的、技術的な美を見出されるが、その美的作用もまた、マスメディアによるものである。さらにマスメディアは、突出性を伝えるという作用も持ち、くわえて、選手の人格や

精神性なども現代においては広く伝えている。そしてまた、野球ゲームや野球漫画のような表現媒体としても、時として野球におけるプレイやフォームを「美的」なものとして扱うのである。

メディアは多くの人々に、当該スポーツの知識や見どころ、技術、文化を伝える。それは選手が「みられたい」シーンやプレイ、選手像とは異なることもあるだろう。しかしメディアの作用により、人々は見どころを理解し、そのメディアによってなにかしらの方法で加工、切り取られたものとして享受する。だが、それより一層、当該スポーツを理解するためには、それらの「切り取られた」ものを時として享受し、批判するために、スポーツ工学だけの知識ではなくそのスポーツ全般（文化的背景や技術的な議論、流行等、さらには当該メディアに対する知識）も必要になる。

そのようにして技術美や人間美、当該スポーツにおける精神性、成績・フォームの突出を複合的に判断する必要がある。それは、ある意味で当該スポーツの「文化的背景」といえる。その「野球の文化的背景」はメディアが報道・表現してきた一面があり、そして、そこで語られる「美的性質」はそうした特定のスポーツの特殊な文化的背景をもとに語られている。

その特定スポーツの文化的背景により、はじめて意味と価値が理解できるプレイ、フォーム、成績をはじめとした突出性といったものがあるといえるのではないだろうか。

註

(1)　『プロ野球批評宣言』（草野進編、新潮社、1988 年）、蓮實重彦『スポーツ批評宣言あるいは運動の擁護』（青土社、2004 年）などは、数少ない美学的な観点からのスポーツ批評、論考と言える。これらは野球にある種の「美」があることへの言及はあるものの批評の域を超えていない。

(2)　フロースポーツに関しては、フットボールやホッケーを例にあげ、また形式スポーツに関しては「芸術点」のあるようなスポーツを指す。

(3)　この点については町田樹『アーティスティックスポーツ研究序説——フィギュアスケートを基軸とした創造と享受の文化論』（白水社、2020 年）を参照のこと。

(4)　中井正一「スポーツ美の構造」（執筆年月日不明）『中井正一全集 1』久野収編、美術社、1981 年、

422-449 頁、425 頁。

(5)　近藤英男「スポーツ美学とは何か――スポーツ美学の現代的意義」『スポーツ美学論』不味堂出版、1976 年、8-25 頁。

(6)　中井、前掲書、416 頁。

(7)　樋口聡『スポーツの美学――スポーツの美の哲学的探究』ナカニシヤ、1987 年、269 頁。

(8)　樋口、前掲書、243 頁。

(9)　樋口、前掲書、243-244 頁。

(10)　樋口、前掲書、244 頁。

(11)　樋口、前掲書、245 頁。

(12)　樋口、前掲書、245 頁。

(13)　樋口、前掲書、199 頁。

(14)　鈴木直樹「野球における投手の投球に関する運動技術史的研究――オーバースローにおける「下肢の動き」を中心にして」『スポーツ史研究』2014 年、Vo.27（0)、61-74 頁。

鈴木直樹「野球における投手の投球に関する運動技術史的研究――オーバースローにおける「バックスイング」を中心にして」『スポーツ史研究』2012 年、Vol.25（0)、65-71 頁。

鈴木直樹「野球における投手の投球に関する運動技術史的研究――オーバースローにおける「フォワードスイング」を中心にして」『スポーツ史研究』2013 年、Vol.26（0)、49-62 頁。

(15)　前林清和は、武道を例にとり、その「型」にある種の普遍性と伝統、そして美的な価値を見出しながらも、それらは個人や時代によってその都度変化しうる「今様」なものであり、そこにはある種の創造性があると指摘している（前林清和『近世日本武芸思想の研究』人文書院､2006 年)。

(16)　樋口、前掲書、175 頁。

(17)　本稿では「武士道野球」の歴史や思想について深く論じることはしないが、「武士道野球」に関する論考については以下を参照した。

菅野真二『ニッポン野球の青春―武士道野球から興奮の早慶戦へ』大修館書店、2003 年。

坂上康博『にっぽん野球の系譜学』青弓社、2001 年。

高柿健「高校野球フィールドマネジメント 4.0――「武士道野球」と「スポーツ野球」の信念対立の克服を目指して」『城西大学経営 紀要』2020 年、Vol.16、145-155 頁。

長谷川千春「ジェントルマンからサムライへ――日本武士道野球における英国騎士道」『立命館言語文化研究』2019 年、217-226 頁。

(18)　飛田穂洲『飛田穂洲選集第三巻　野球記者時代』ベースボールマガジン社､1960 年（初出：『野球清談』東海出版、1940 年)。

(19)　樋口、前掲書、175 頁。

（20）　飛田穂洲『飛田穂洲選集第四巻 ベースボール 攻撃編練習編』、ベースボールマガジン社、1959 年、316 頁。（初出：『ベースボール攻撃篇』実業之日本社、1927 年。）

（21）　根岸貴哉「飛田穂洲における「武士道野球」と「型」」『Core Ethics』2021 年、Vol.17、191-201 頁。

（22）　野球における「フォーム」は、機能的、技術的なものであると同時に、精神性、人格、さらにはある種の流儀のようなものを含めた、まさしく「武道的」な「型」と捉えられることも多い。

（23）　樋口、前掲書、55 頁。

（24）　伊良部秀輝、吉井理人『最新最強のピッチングメカニクス』長岡書店、2010 年。

（25）　小田伸午『新版 一流選手の動きはなぜ美しいのか――からだの動きを科学する』KADOKAWA、2019 年。

（26）　渡辺俊介『アンダースロー論』光文社、2006 年、80 頁。

なお樋口もまた「観戦者は、それを全体的なまとまりとしてのイメージ、像として把握するのであり、決してボールを打った瞬間の美しさなどとしてとらえるのではない」（樋口、前掲書、197 頁）と、渡辺と同様に瞬間的な美ではなく全体のまとまりとしてのあり方を強調している。

（27）　樋口、前掲書、72 頁。

（28）　この点については拙著『野球のメディア論――球場の外でつくられるリアリティー』（青弓社、2024 年）を参照のこと。

（29）　樋口、前掲書、74 頁。

（30）　春木有亮「「恰好」から「かっこいい」へ ――適合性 suitability の感性化」『人間科學研究 Studies of human science』2017 年、Vol.13、1-30 頁。

（31）　春木はこれを鷲田清一が『てつがくを着て、まちを歩こう』（ちくま学芸文庫、2006 年）においてファッション論として展開した「はずし」という概念であると述べている（春木、前掲書、27-28 頁）。わずかに適合したものからずれていること、はずれていることによって、他との差異化がはかられ、その対象が際立つ。